　五月になっても部室からコタツを撤去させない男、それが大庭である。

　は部長である。大学三年。ダメ人間の第一線を行く男。彼女なし甲斐性なし卒業見込みなしのないない尽くしのドンマイ人間である。彼とニートを区別している点は、まがりなりにも彼が大学生というところである。

　それが大庭雅志という男である。

　彼が今心血を注いでいることが一つある。それは、部室からコタツを撤去させないことである。

　彼はコタツの布団にしがみ付いて断固座り込み――否、寝込み、の姿勢を取った。

「我々は断固反対である！　コタツをこの部室から撤去することはまだ早すぎるのである！　考えてみろ、いきなり冬眠から叩き起こされたウサギはどうなる？　クマは？　リスは？　凍え死ぬだけだ！　生物には必須なエネルギーとして、温かさというものがある！　温かさ、そう、それは――あっ、あぁ！　あぁ――！」

「いいかげんにしろ！　このダメ人間！」

　引っぱがされて、その楽園の象徴はずこずこ運び出されてしまう。

　がっくりと頭を垂れる。

　ぽたり、と一滴の涙。

「そんな……あ、あんまりだ」

「これ、んちに運んどいてくれる？　大丈夫？　あんた場所わかる？」

「うっす。わかりまっす」

　瀬戸とのやり取りが部室外から聞こえる。

　瀬戸は、ひょい、と顔を部室の中に向けて、絶望の海に沈んでいる先輩の頭部を見て、哀れそうに眉を下げる。

「先輩……さすがに、五月にコタツは無理っす」

　そして、とどめを刺した。

　大庭は倒れ伏した。

　が部室に入ってくる。

「あんたねえ。いいかげんにしなよ。まだ沈んでるわけ？　五月にもなってまだ部室にコタツ置いてるサークルなんか、見たことないよ。ったく咲のやつ……」

「おまえは人殺しだ……」

「あん？」

　美しい顔を持つ副部長、神月里菜は顔を上げる。

「冬眠中で腹をすかしているこの私を――っ！」

「うざっ。人間は冬眠しないし腹空いてんならそこのコンビニでおにぎりでも買ってくればいいでしょ」神月は窓の外に目をやって、行けと命じた。「さっ、どいたどいた。これから掃除するんだから。ったく、こんなものがあるから人間は堕落するんだ。部屋は汚れるし、精神が汚染されていく。ちょうどあんたのようにね」

「……」

　精神が汚染されていると断定を受けた大庭は、がっくりと首を曲げた。そして、神月に床に転がってるゴミのように押し出されるまで、そのままでいた。

「邪魔なんだよ。っていうか何もしないでずっとそうしてるんなら、手伝ってよ」

　大庭はむっくりと起き上がった。

「……しかたない。しかし、これだから女というやつは……」

「そっくりそのままあんたにそれを返してやるよ」

　無駄口を叩きながら、二人はもそもそてきぱきとゴミやいらなくなったものをまとめ、床や壁をぞうきんで拭いていく。

「ああ……何だか寒い」

「これから嫌でも暑くなって、心の弱いあんたはクーラーが欲しい、扇風機が欲しい、海へ行きたいとか言い出すんだろ」

「む……まだ言ってないではないか」

「昨年、一昨年の言動がそう証明してるよ」

「私はそんなことを言っただろうか」

「言ったでしょ」

　神月は肩をすくめた。

「あんたウェブの日記に、『私は夏が好きだ。あのジリジリとした暑さが待ち遠しい！』とか書いてたじゃない。普段でも『はやく夏が来ないかなぁ』『寒いのはウンザリだ！』とか言いまくってたし。それで夏が来てみりゃぁ、『ひどい暑さだな！』『こんな時に外を歩くやつはどうかしてるぞ！　図書館に行こうではないか！』って言ってたでしょ。ウェブには、『私は汗をかくから夏が嫌いである。はやく寒くて過ごしやすい冬が来てくれないかなあ！』って。アタシゃ、それを見たとき、ああこいつはだめだな、って思ったね」

「ひどいじゃないか！」

「え？」

　きょとん、と神月は目を丸くする。

「そう思ったら、ひとつコメントでも！」

「あぁ、あんたいつもコメントゼロだもんね」

　哀れだなぁ、という目でうすく笑う。

「あんた、こんなコメントもらって嬉しいの？」

「何もないあの一人ぼっちの寂しさよりはいいものだよ。罵倒というものはね！」

「あ……そう……」

　神月は顔を引きつらせつつ、くるりと背を向け、ゴミ箱のゴミを片づけ出す。

「あんたさ、このゴミまとめておいてくんない。アタシ、学生課に行ってゴミ出しの申請してくっからさ」

「よかろう。引き受けた！　ゴミはまかせろ！」

「ゴミはゴミに、ね」

「何か言ったかね！」

「いいや何にも！」神月はにっこりと微笑んだ。そうしてシャツの第一ボタンを開けて手で扇ぎながら、部室の外を見た。

「アタシこれからフランス語の授業行くんだけど、あんた何かある？」

「何もないぞ！　そうだなぁ、ここで一人で漫画でも読んでいるか！」

　楽しげに笑う大庭部長に、またもや呆れた眼差しを注ぐ神月副部長だったが、溜息を一つつくと、世話を焼く者の眼差しになって、まるで彼のお母さんみたいに、口々に注意を促すのだった。

「あんた忘れてるかもしれないけど、アタシ四限英語で五限ゼミだから。チョー忙しいんだけど、ついてねぇからしょうがない。いい？　あんたは三限終わってから来るさつきと咲と一緒に二宮ちゃんのバースデーパーティの準備をすること。たぶん瀬戸も運び終わったら戻ってくっはずだからさ。そういえば、あんたまだ二宮ちゃんのバースデープレゼント買ってないよねえ」彼女は溜息をついて腕を組んだ。「ほんとどーしようもないやつ。いい？　瀬戸が戻ってきた段階で買いに行けよ？　上野でも、池袋でも好きなほうでいいからさ。瀬戸と一緒に買って来い。二宮ちゃんは四限で終わるって言ってたけど、次の日の一限の予習とレジュメプリントしてから来るって言ってたから多分遅れる。ま、五時くらいには来るでしょうよ。ちゃんと祝ってやれよ？　アタシいないんだからさ。不安なんだよ」

「はい、はい」大庭は母の小言を聞かされる息子のように寝っ転がったまま片手だけで返事をした。

　大庭の目線は漫画のページに注がれている。

「うっぷくくく」

　と、漫画のギャグシーンに頬を膨らませている大庭に、神月が頭に血管を浮かべた。

「聞いてんのかおまえはぁー！」

「うぷぷぐっ！」

　鳥が胴体を掴まれたような不気味な声を上げ、大庭は横転する。

「何をするのだおまえは！」

　こめかみを押さえたまま立ち上がる大庭。神月は拳をじっと見下ろし、大庭の頭のそれがヒットしたところを見ながら、答えた。

「脳の伝達を障害しているしこりがあったから、アタシがそれをほぐしてやったんだよ」

「え……？　なんだって？」まだジンジンするこめかみから手を離して、大庭は歓喜した。

「おまえはそんなことができるのか！　すごいな！　将来はきっとそれで食っていけるに違いないぞ！　おお……気のせいかもしれんが、体が軽くなった気がするぞ！　ありがとう！　神月！」大庭ははしっ、と神月の両手を胸のところで合わせるように掴み、まるで命の恩人に巡り合えたかのように熱狂した。「私の脳の、伝達をしているしこりをほぐしてくれて！」

　神月は、大庭に顔を近づけられて、気味悪そうに、顔を後ろに下げた。

「あんた……おかしいって。はっ……もしかしたら、アタシは大庭の大事なところを壊してしまったんじゃ？」

「なーに言ってるんだ！」

　大庭は手を離して、非常に元気よく腕をぐりぐりまわし、最後にむきっとマッスルポーズを取ってみせた。

　彼の茶色いジャケットがぱらりと揺れる。

「このとおり私は大大大、大元気だ！　なにしろ神月に脳のしこりを取り除いてもらったんだからな！　よぅーっし、みんなにも自慢しよぉーっと！」

「いっ、いやいやいや！　アタシがやったってことは言わないでおくれよ！」

「む……何故だ？」

「あー……えーっと……」神月はふと腕時計を見つめて、ぎょっとした。「やだ！　もうこんな時間？　フランス語の授業が始まっちゃう！　悪い、大庭。アタシが今言ったことはよく覚えておいて。二時半にさつきと咲が来るはずだから、それで瀬戸を合わせてバースデーパーティの準備をしておいて。プレゼントを買ってないあんたはちゃんと買っておけよ！　あとアタシがあんたの頭を悪くしたことは誰にも言うなよ！　いいか、誰にもだぞ！　いいね！　それじゃ！」神月はノートの入ったエナメルのバッグをつかまえて、慌しげに突き当りの階段を降りて行った。とんとんとんとん、とんっ、と最後の二段を一気に飛び越すジャンプ。すとん、とタイル床に着地する音。それからほぼ連続的に床を駆ける音が聞こえたかと思うと、ギィ、とやや重いガラスの扉を開けて、足音は、見えない青空のもとへと去っていった……。

　大庭は、部室の中を見回しながら、ふと窓の開かれた青空に目を留めると、首をひねった。

「あいつは何を言っておるのだ？　だから、頭を悪くしたんじゃなくて、頭を良くしてくれたんだろうが。神月はどういう意図をもってあんなことを……」大庭はふとおめめを大きく開いた。「あ、そうか！」ポン、と手を打つ。「照れていたんだな！」

　大庭はニヤニヤ笑いだした。

「そーかそーか！　神月のやつめ、日頃から人のためになることに慣れてないせいか、この私の怒涛の感激ラッシュに照れくさくなってしまったんだな。いやー、モテる男はつらいな！」

　人は、このような男を俗に「ダメ人間」と呼ぶ。

「いやいや、しかしさすがに神月の療法は素晴らしいな！　頭がスッキリして、先ほどの伝言を全て覚えられたぞ。えーと……二時半に西野と美奈川がやって来るから、瀬戸と二人で心して待て！　か。バースデープレゼントとは誰のプレゼントであったかな。あれ、おかしいぞ。思い出せん！　いや、さては、神月のやつ……言い忘れていきおったな！」大庭は呆れて憤慨した。しかしすぐに彼の笑みへと取って代わられた。

「何てことだ！　照れ屋さんの上におっちょこちょいさんだったとは！　カワイイではないか神月！　ウハハハハハ！」

　彼は天井を見上げて馬鹿笑いした。

　いとも間抜けで憐れみを誘う光景である。

　彼は高笑いを終えると、早速地べたに横たわって、漫画を読み始めた。

「時機が来ないうちは焦らず待て！　焦っても始まらん！　私はたくさんやることがあったのだ。まずは、この『シティハンター』を全巻読破せねば！　はっはっは！　そしてその後は、あのゲームを攻略して……」

　たまに世の中に、遊ぶのが忙しくてたまらんわい、と言ってのける人がいるが、この男ほど真面目にそれを口に出す者もいないだろう。

　事実、彼の頭は、遊びが八割、食事が一割、勉強が○、三割、あとの○、七割はカステラでできていた。

「おー……」

「おつかれさんですっ！」

「つかれさんです」

　二つの高い声が、この「演劇部室」に響いた。そう、「演劇部」である。

　それがこの部の名称と形態であった。

　二人が訪れたとき、彼女らの部長は、タイル張りの床に、申し訳程度に座布団をしいて寝そべっていた。

　……現在執筆中でござる……